

## 円板状半月板切除術後に外側コンパートメントの軟骨損傷を来した1例

○田中 慶尚 (たなか よしひさ) (MD)<sup>1)</sup>, 中川 泰彰 (MD)<sup>1)</sup>, 山田 茂 (MD)<sup>1)</sup>,  
向井 章悟 (MD)<sup>1)</sup>, 向田 征司 (MD)<sup>1)</sup>, 二宮 修三 (MD)<sup>1)</sup>, 坪内 直也 (MD)<sup>1)</sup>,  
松岡 将之 (MD)<sup>1)</sup>, 中村 孝志 (MD)<sup>1)</sup>, 瀬戸口 芳正 (MD)<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 国立病院機構 京都医療センター 整形外科

<sup>2)</sup> みどりクリニック

### 【目 的】

他院で円板状半月板形成術を施行され、その後明らかな外傷もなく、外側コンパートメントに軟骨損傷を来した1例を報告する。

### 【症 例】

17歳女性。中高は陸上部。明らかな外傷はなく、中3時に左膝関節痛を自覚し、他院で外側円板状半月板に対し、形成術を受けた。術後は一旦膝痛消失し、陸上にも復帰できた。初回手術から2年後、特に誘因なく、左膝痛及び引っかかり感を来し、陸上競技もできなくなったため、みどりクリニックを受診した。関節鏡検査の結果、大腿骨外顆、脛骨外側の軟骨損傷を指摘され、当院紹介受診となった。初診時、正座は可能であったが、膝30度以上の屈曲位からの伸展は膝痛と引っかかり感のためできなかった。当院初診の1ヶ月後、手術を施行した。大腿骨外顆、脛骨外側に直径1cmのICRS分類4度の軟骨損傷があり、両部位に直径8mmの骨軟骨柱を1個ずつ移植した。靭帯の機能不全や内側コンパートメントの損傷はなかった。3週間の免荷の後、3ヶ月目から自転車、4ヶ月目から軽スポーツが可能となった。14ヶ月後の再鏡視では、ICRSの再鏡視点数で大腿骨側10点、脛骨側11点と良好な状態であり、スポーツも満足できるところまで復帰していた。19ヶ月後の現在、たまに引っかかり感が出現するが、正座可能であり、術前の症状は消失していた。

### 【考 察】

今回の軟骨損傷の原因は明らかではない。半月板が消失した結果のOA変化としては2年の経過であり、早すぎるようにも思われる。脛骨側骨軟骨移植術の手術のポイントも含め、報告する。